



SDGsとビジネスをつなぐパイオニア ～しがハブの挑戦～



2020年9月9日の「しがハブセミナー」

しがハブと生み出す 新たなビジネスの芽

しがハブは、約2年間の活動で30以上のSDGsビジネスに携わった。SDGs達成のサポートを行い、新しいビジネスの土台作りにつなげている。

「朝恋トマト」を生産している近江八幡市の浅小井農園株式会社では、家庭で出た廃食油を回収しバイオディーゼル燃料としてハウスの暖房設備に再利用するシステムを構築した。環境に優しいだけでなく重油よりも少ないコストで利用でき、また、地域住民とのコミュニティを形成し、ブランドの周知を行うことが狙いだ。

SDGs宣言をした株式会社京都工芸「タオルはまかせたろ」では、使い終わったタオルを回収して土嚢を作ったり、タオルを作るときに出てしまう糸の集まり（耳）を使って宅配をする時の緩衝材にするなど一手間をかけることで様々な課題を解決し、持続可能な社会にするための取り組みを行った。今後しがハブを通じてさらに新プロジェクトの展開を検討している。

SDGsと企業を結ぶ 拠点「しがハブ」

滋賀SDGs×イノベーションハブ（愛称：しがハブ）は滋賀県内の企業と共に、SDGsの達成を目指した新たなビジネスを生み出している。「なぜ今SDGsなのか？」という疑問を持つ企業に、SDGsに取り組むメリット・取り組まないリスクを説明し、一緒にSDGsの達成を目指す。

企業が新たなビジネスを創出する上で、しがハブがキーワードとするのが「アウトサイド・イン」のアプローチである。すなわち、インサイドにある技術や資本を基に新たなビジネスを考えるのではなく、アウトサイドにある社会的な課題を基に、企業の強みを生かしたビジネスで解決するのだ。

時には企業の深くまで入り込み綿密にコミュニケーションを行うこともある。企業と協力して活動を行うには、その企業としっかり向き合うことが大切だ。

SDGsに根差した ライフスタイルを送るには

取材に応じたしがハブの國友さんは「企業だけでなく学生にも自分の生活の中でSDGsを意識してほしい」と話す。SDGsは世界的なスケールの大きい目標であり、個人の力ではどうにもならないと考えがちだ。だからこそ、自分のライフスタイルの範囲に合わせて「自分ごと」として捉える努力をすべきではないだろうか。

企業の他にNPOや学生をどれだけ巻き込めるかが、しがハブの次の鍵となる。私たちもSDGs達成に向けて、一人ひとりがSDGsの取り組みに積極的な姿勢を見せることが必要だ。



Zoomでの取材の様子

取材先

滋賀SDGs×イノベーションハブ

愛称「しがハブ」。2018年10月、滋賀県と経済界が協力し、官民連携の組織として創設。県内の社会的課題の解決につながるイノベーション創出を目指す。



取材者

滋賀大学 中山剛志
滋賀大学 真野晃匡
立命館大学 岡本七海

学年・所属がそれぞれ異なる中、SHIGA SDGs Studioプログラムを通して交流。コロナ禍において、一度も会わずに取材・記事作成を行った。